

北海道型クアオルト形成にむけた国民保養温泉地の空間構造分析

札幌市立大学デザイン学部助教 上田 裕文

1. はじめに

北海道の温泉地の空間的な特性を、その周囲の森林や農村景観と一体的に調査分析し、滞在型保養地（クアオルト）形成のための基礎データを整理し、今後の課題点を導き出すことが本研究の目的である。北海道では依然、ドライブ観光を中心とした点と点を結ぶ周遊型・通過型観光が中心である。近年ではヘルスツーリズムへの注目も高まっているが、森林をはじめとする自然資源を人間の歩ける範囲で組み合わせた滞在型の健康保養地としての地域空間づくりはまだ一部で始まったばかりである。このような健康保養地の考えは、ドイツで古くから取り組まれている「クア（保養）オルト（地区）」の考えに共通する。日本においても大分県の湯布院が「クアオルト構想」に基づいたまちづくりを行ない、先進温泉観光地として広く知られている。北海道は本来、そのヨーロッパ的な気候や美しい自然、農村景観の牧歌的イメージから、クアオルト形成に最適の条件を揃えている。そこで本研究では、本来、保養地形成を目的に国に指定された、国民保養温泉地を対象とした空間特性の基礎データを整理し、地域振興を目指したクアオルト形成の空間的ポテンシャルを検討する。

2. 研究方法

本研究は、「国民保養温泉地」を対象地として、以下の 3 つの手法を用いて調査を行った。

- ・文献調査 …… 2. ①
- ・対象地の空間構造調査 …… 2. ②
- ・関係者に対するヒアリング調査 …… 2. ③

2. 1 対象地の設定

まず、調査の対象地を北海道に 15 箇所指定されている国民保養温泉地とした。本研究は、北海道型クアオルトの形成のための空間データの整理を目的としているが、なぜ国民保養温泉地に着目した調査を行うかを説明する必要がある。以下に「クアオルト」と「国民保養温泉地」の条件項目を挙げ、比較する。

表1 「クアオルト」と「国民保養温泉地」の条件

クアオルト（引用：上山市クアオルト協議会HP）	国民保養温泉地（引用：環境省HP）
その土地に特有な治療素材と治療手段がある。	環境衛生的条件が良好であること。
気候条件や景色が良い。	付随一体の景観が佳良であること。
目的に沿った適切な保養・療養施設がある。	温泉気候学的に休養地として適していること。
治療効果が医学的に証明されている。	適切な医療施設及び休養施設を有するか、又は将来設立し得ること。
工場や都市郊外による汚染がない。	医学的立場から適正な温泉利用、健康管理についての指導を行う顧問医が設置されていること。
騒音と交通公害から隔離されている。	災害に対し安全であること。
衛生上の配慮が十分にされている。	
専門の温泉気候療法医が常任している。	
訓練された有資格者の専門療法医がいる。	

このように、「クアオルト」と「国民保養温泉地」には環境要素の質、それに関わる施設、医学的根拠などと条件が重なっている部分が多く、ほぼ同じ理想像であることがわかる。よって、元々「クアオルト」としてのポテンシャルが高いとされる「国民保養温泉地」に絞り込み、その空間のポテンシャルを調べることで今後の北海道型「クアオルト」形成にむけたデータ、課題点などを得ることが可能であると考えられたため、対象地を絞り込んだ。

そもそも「国民保養温泉地」は、昭和29年に厚生省（現在は環境省が担当している）が指定したのが始まりであり、日本国内では以前から「保養」や「癒し」などを重視した保養地の形成を試みていると推測される。しかし、これまでの日本はそれとは逆行したマスツーリズムの最盛期を迎え、多くの国民保養温泉地が「秘湯」と呼ばれるように細々と経営していくことになる。だからこそ、国民保養温泉地が現在の「癒し」に合致した温泉地である可能性は高いと考えられる。このように、ある意味時代の先を行っていたのかもしれない「国民保養温泉地」をもう一度見直す必要があるだろう。

2.2 手法

(1) 文献調査

現地調査の予備調査として文献調査を行う。そのため、実際の調査において視察する場所、ヒアリング調査を行えそうな施設などを中心に調査した。後の結果では温泉地の概要を示すものである。

(2) 対象地の空間構造調査

北海道にある12箇所の国民保養温泉地の空間的特徴に関する現地調査を行った。ここでは空間の「構造」に着目した調査を行った。「クアオルト」が周囲の環境要素を上手く利用した保養地であることからも、周囲の環境をどのように利用しているのか、又は利用可

能かということを現地調査によって明らかにする必要がある。ケビン・リンチは空間の要素を5つのエレメント（パス・エッジ・ノード・ディストリクト・ランドマーク）で表したが、その中でも重視したの「パス」とそれらの要素が実際の空間に当てはめて調査することで、周辺環境の利用の仕方を構造化することが可能だと考えられた。

（3）関係者に対するヒアリング調査

現地の空間的特徴に合わせて、温泉地関係者（温泉・宿泊施設経営者、地域住民、観光協会等）に対してヒアリング調査を行った。主に温泉地全体でのヘルスツーリズムに関する取り組みの現状や、客層、医療施設と関係などの温泉地側の認識する温泉地の状況を把握するためである。現状と「調査②」との連続性があるかないか、また連続している場合それらが上手く機能しているかしていないかを調査する事で、これから温泉地の課題点、あらたな知見を得られるものと考えられる。

以上の3つの調査方法によって、各温泉地を比較考察し、目指すべき課題点を整理することによって、クラオルト形成に向けた温泉地の方向性を見出したい。



図1 調査の流れ

3. 結果

北海道の国民保養温泉地に指定されている15箇所のうち、12カ所の現地調査を行った。前述の調査方法から得られた結果を、①温泉地の概要、②空間的ポテンシャル、③保養に関する取り組みの現状の順に記述する。

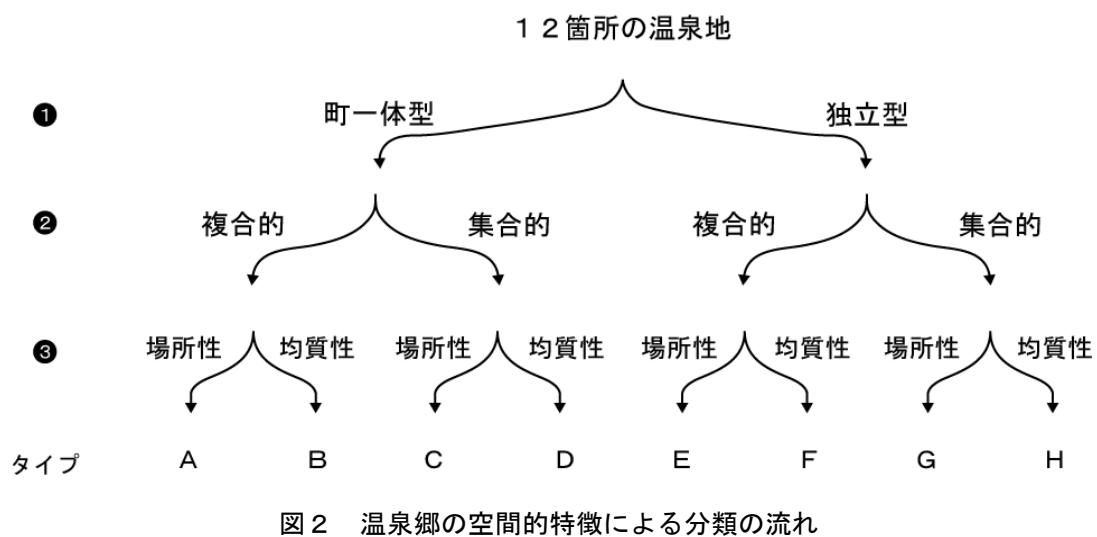
得られた結果を「クラオルト」の観点から考察し、北海道におけるクラオルト形成に向けた課題点を明らかにする。

3. 1 分類の詳細

「クラオルト」が周囲の環境要素を利用した保養地であることから、今回調査を行った温泉地を周囲の環境の特徴をある程度分類し、各温泉地の方向性を見出す必要があると考えられる。まず、空間構造調査から得られた結果から空間タイプを分類し、それぞれのタ

イプごとに個々の温泉郷の結果を記述する。空間タイプの分類は以下の項目で行う。

- ①市街地との境界、領域、距離の面から「町一体型-独立型」に分類
- ▽
- ②周囲の環境要素、施設等の連続性から「集合体-複合体」に分類
- ▽
- ③空間構造がその地形や自然環境に沿ったものであるかどうか「場所性-均質性」に分類



(1) 「町一体型-独立型」の分類

まずは、[市街地]との関係に着目した。現在着地型観光が重要視され、「クアオルト」はその代表例でもあるため、対象地が [市街地]と一体的な計画による「日常生活の中での健康づくり」が可能なものを選び出す（町一体型）。次に、当てはまらないものを「非日常的体験での保養」という分類とした（独立型）。その指標として以下の2つの基準を設定した。

市街地との一体的な計画はその温泉地と市街地の「領域」が重要な要素になると考える。樋口（1975）は、ランドスケープの空間構成要素として、「境界、焦点・中心・目標、方向、領域」の4つをあげている。今回調査を行った温泉地において、町と一体的な温泉地の計画が必要か、または温泉地として独立した計画が必要かを判別する際に、特に「境界」、「領域」が重要な要素であると考えられる。そのため、温泉地域を規定すると考えられる空間的要素として、【標高の高い山】、【トンネル】、【河川】などをその要素とし、それらの有無をひとつの基準とした。

次に、領域の境界が弱い場合でも、市街地との距離によって領域が分かれる場合もある。そこで、市街地と温泉地の物理的距離を基準に加える。日本国内において、先進的に「クアオルト」の形成を目指している温泉地として「かみのやま温泉」が挙げられるが、ここ

では、周囲の環境に触れながらの「健康ウォーキング」を行っている。人の身体に効果的とされるウォーキングの適正時間は、20~60分とされているため、町一体型の基準として、市街地と温泉地の距離がこの範囲程度であることがひとつの基準として妥当であると考えられる。距離にしておよそ1.5~4kmほどである。

(2) 「複合体-集合体」に分類

2つ目に、施設、道などの温泉地として計画された要素が脈略を持った複合体であるか、又は単にそれらの要素が集合しているだけかを分類する。これは、温泉郷における利用者の行動範囲などを規定するものであり、徒歩圏内の空間で長期滞在する「クアオルト」の観点からして重要な視点であると考えられる。ケビン・リンチ（1960）は、空間構成要素を5のエレメント（パス、エッジ、）に分類しているが、この点については、パス（フットパス、ウォーキングコースなど）によって施設や環境要素が繋がれているかに着目した。

(3) 「場所性-均質性」に分類

最後に、地形、環境要素、施設、などの空間がその土地に合った構造であるかどうかを分類する。エドワード・レルフ（1991）は、近代的な土地に関わらない不変的な空間を「均質空間」と言い、それらに偏った空間を批判した。観光の分野においても同様に、マスツーリズムにみられる大衆的（均質的）な観光の形態が問題視されている。「クアオルト」の様な地域の自然資源を利用した環境づくりが着目され始めたのも、着地型観光が求められる現在だからであり、これを分類の基準に用いる事が必要であると考えられた。

(4) 分類結果

以上の分類の流れから、各温泉地は「Aタイプ」「Cタイプ」「Eタイプ」「Fタイプ」「Hタイプ」の5つに分類することができた。

表2 分類結果

	分類	温泉郷名
Aタイプ	町一体型、複合的、場所性	洞爺・陽だまり、
Cタイプ	町一体型、集合的、場所性	恵山、ながぬま、幕別
Eタイプ	独立型、複合的、場所性	十勝岳、ニセコ、雌阿寒
Fタイプ	独立型、複合的、均質性	北湯沢、盃
Hタイプ	独立型、集合的、均質的	芦別、カルルス、豊富

3.2 調査結果

調査結果を、分類したタイプごとの個々の調査結果を記述する。内容は、温泉地の概要、空間的ポテンシャル、保養に関する取り組みの現状である。

3.2.1 「Aタイプ」の調査結果（洞爺・陽だまり）

（1）洞爺・陽だまり温泉

①温泉地の概要

洞爺温泉は、【洞爺湖】の北西岸の洞爺町（旧洞爺村）に位置し、【洞爺湖】の南の洞爺湖町に位置する洞爺湖温泉とは別に温泉地を形成している。【とうや・水の駅】には町づくり協会があり、洞爺湖観光の拠点として利用できる他、洞爺名産の農産物が販売されている。また温泉施設としては、町営の【洞爺いこいの家】や、【ホテル洞爺サンシャイン】があり、高台に位置しているため【洞爺湖】を眺めながら入浴できる。近隣には【キャンプ場】もある。

②温泉地の空間構成

洞爺・陽だまり温泉郷は、【洞爺町市街地】内に位置しているため【市街地】との関わりは強い。周囲には【住宅地】のほか、【医療施設】、【洞爺湖】、【キャンプ場】、【別荘地】などがある。【市街地】の【洞爺湖】周辺にある【支笏洞爺国立公園】を含めた「財田・田園と湖畔を巡るコース」と呼ばれる【フットパス】を歩くと、それらの要素を一通り巡ることができる。【別荘地】の辺りは少し高台になっているため、【洞爺湖】を見降ろすことができる。【水辺の里財田オートキャンプ場】や【夕陽が見える渚公園】では高台からの眺めとはまた違った良さがあり、【洞爺湖】を間近に感じることができる。このように、洞爺温泉地では高台と低地両方からの眺めを楽しむことができる。【フットパス】のコースとは別に、車で【山道】を登って行ったところには、【洞爺温泉病院】や【武四郎坂駐車公園】がある。この【武四郎坂駐車公園】からは洞爺全体を見下ろすことができるのだが、成長した【木】によって景色が見られないという問題もある。以上の点より「Aタイプ」に分類した。

③ヘルスツーリズムに関する取り組み

洞爺湖温泉の洞爺ガイドセンターでの「食事」と「自然」のツアーや、【洞爺さくらパークゴルフ場】での温泉とのセットプランなどはあるものの、温泉地のある洞爺町自体では「温泉」と「自然」のヘルスツーリズムの取り組みは行われていない。また、こうしたヘルスツーリズムとは関係なく、温泉よりも食べ物ツアーといったプランの印象が強い。洞爺には【洞爺温泉病院】が存在し、温泉も湧き出る施設であるが、ここは内科しかなく、温泉を利用した保養や療養がされていない。さらに2009年、【洞爺湖有珠山】は、世界的に貴重な地形や地質、火山、断層などを有する自然公園を認定する「世界ジオパーク（地質遺産）」に選ばれたが、これらをうまく活用した例は見られなかった。以上からも【市街地】に位置するにもかかわらず町民を相手にした取り組みが少ない事も問題点であると考えられる。

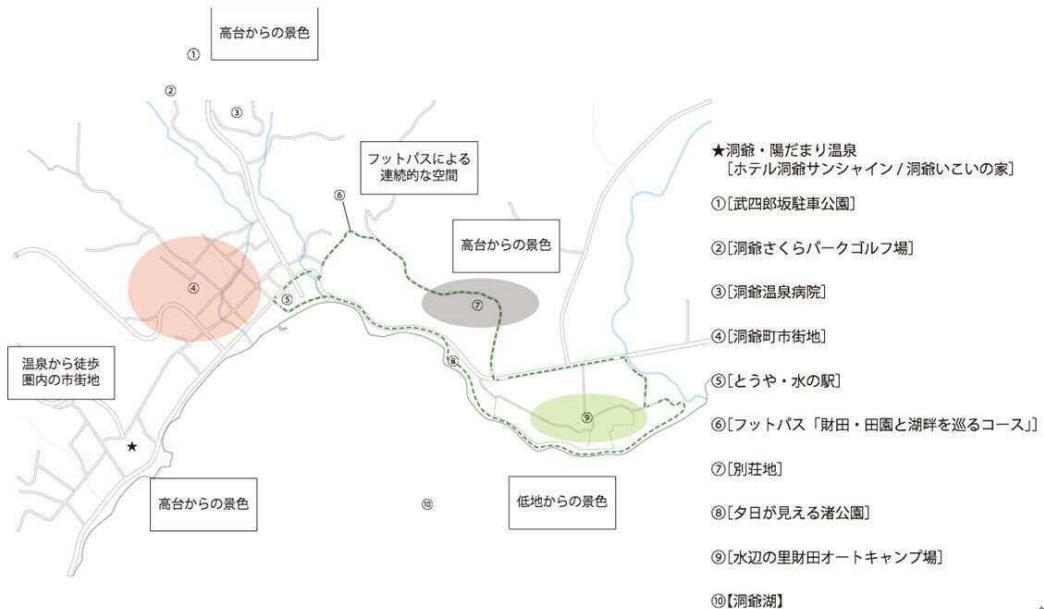


図3 「洞爺・陽だまり温泉郷」の調査結果

3.2.2 「Cタイプ」調査結果（恵山、ながぬま、幕別）

(1) 恵山温泉

① 温泉地の概要

恵山は、旧恵山町と旧樺法華村にまたがる 618m の【活火山】である。その【恵山】をぐるりと囲むように広がる恵山温泉郷は、1965 年（昭和 40 年）に、当時の厚生省に国民温泉保養地として指定された。温泉宿泊施設としては、[恵山温泉]、[石田温泉]、[ホテル恵風] がある。また海岸沿いには、潮の満ち引きによって入浴できる、自然の温泉 [水無海浜温泉] がある。【恵山】の頂上までは【登山道】があり、ハイキングが楽しめる他、山一帯は【恵山道立自然公園】に設定されており、[恵山つつじ公園] では 5 月下旬から 6 月にかけて見事な【ツツジ】が咲き誇る。さらに、[恵山海浜公園] や [恵山岬灯台公園]、[恵山シーサイドパークゴルフ場] といったレジャー施設も存在する。

② 温泉地の空間構成

恵山温泉郷の最大の魅力は【恵山道立自然公園】と【恵山高原】の大自然である。標高 618m の【山麓】に広がる 60 種類以上の【高山植物】、まるで日本にいるとは思えないほどの荒々しい山肌と硫黄に覆われた【山頂部】、そして見下すとそこには【海食崖】や【奇岩】などの変化に富んだ景観が広がる。また【登山道】はしっかりと整備されており、多くの登山客がこの地を訪れる。

しかしこれらの登山を楽しむための【散策路】は整備されているものの、温泉へのアプローチが希薄な空間構成になっている。そのため、温泉は温泉、登山は登山というように、それぞれの目的だけのために訪れる人が多い。これは、空間的視点からみた 1 つの問題である。恵山と温泉との繋がりが薄いというのが現状なのである。また、【恵山高原】だけではなく、[海浜公園] や [パークゴルフ場] と、温泉との繋がりについても同じことがいえ

る。

恵山温泉郷は、1つの場所に施設や自然が集中しているのではなく、各施設が広く分散されたつくりになっている。国民保養温泉地は、1泊ではなく長期間の滞在をすることに大きな意味がある。したがって今後、それら各施設と自然と温泉との空間的関連を持たせることが重要となってくる。以上の点より「Cタイプ」に分類した。

③ヘルスツーリズムに関する取り組み

恵山温泉郷では、ヘルスツーリズムの取り組みがほとんどされていない。というのは、[温泉施設] 自体の老朽化や空間的な問題により、恵山温泉郷は「保養地」としてよりも、温泉好きが訪れる「秘湯」として認識されているように感じられた。さらに、[医療施設] は2軒と少なく、各施設を巡るには車がなければ厳しい距離に分布しているので、交通の便が非常に悪い。



図4 「恵山温泉郷（水無海浜温泉）」調査結果

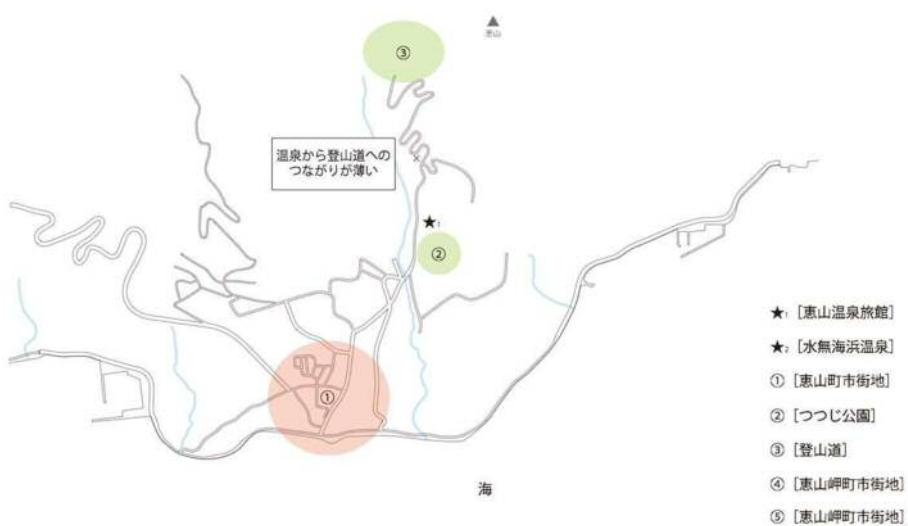


図5 「恵山温泉郷（恵山温泉）」調査結果

(2) ながぬま温泉

①温泉地概要

ながぬま温泉は、北海道夕張郡長沼町市街地から少し外れた【農地】に位置する。また、街全体の8割が田園地帯、2割が丘陵地となっており、自然に囲まれつつ見晴らしの良い町で、農業生産も盛んと、他の農業地域にはない多くの地域資源を持っている。温泉施設は町営の【ながぬま温泉】のみで、【ながぬまコミュニティ公園】内に存在する。周辺施設が充実しており、【キャンプ場】や【パークゴルフ場】、農林省のコンクールに入選した【東庭園】が隣接している。また、少し離れた距離に直接動物に触れることができる【ハイジ牧場】をはじめとし【牧場】が多く存在している。さらには【長沼スキー場】、【屋内ゲートボール場】も利用することができる。

②空間的特徴

温泉施設は【市街地】に近いながらも、【農地】、【森林】、【河川】などの自然環境に恵まれた環境に位置している。丘陵地の手前に位置し、少し丘陵地に向かって歩けば平野を一望することができる。【温泉施設】周辺は【牧草地】や【田んぼ】に囲まれ、交通量も少なく静かな場所なので歩いて自然を楽しむには最適な空間である。程よい起伏もあるので健康づくりにも結びつけられる可能性もある。また【市街地】との距離はおよそ2kmで強い境界線はないため関わりも強いと考えられる。また、長沼町一帯には芸術家の【アトリエ】が点在していることからも、町歩きには適していると考えられるだろう。以上の点をふまえた【フットパス】の整備が期待されるが、【農道】や【一般道】を組み合わせる事で理想的なルートが実現する可能性はあると考えられる。

③ヘルツーリズムに関する取り組み

ながぬま温泉における保養地への取り組みは、今回の調査では見られなかった。また、【ながぬま温泉】、【パークゴルフ】、【オートキャンプ場】などの施設は単体で存在しているように感じた。それぞれの空間の中でのみ（たまに温泉という形で）過ごして、相互間のつながりがない印象を受けた。

しかし、町としての取り組みとして「保健・医療・福祉・文化・芸術・スポーツ・自然を有機的に結びつけた総合的な健康づくり」を目指している。【ながぬま温泉】から2km圏内にある【総合保健福祉センター「りふれ」】は保健・福祉・医療を連携させた【複合施設】であり【トレーニングルーム】から、【治療室】、【プール】、【カラオケルーム】等幅広く完備されている。また、陶芸をはじめ、絵画、石彫などの彫刻・家具等の木工芸・ガラス工芸・七宝工芸等、様々な分野の芸術家の【アトリエ】が点在していることも特徴である。現在はその芸術家のもと住民参加のサークル等も生まれているように、芸術性の高い町であるため、それらを活かしたグリーン・ツーリズムの動きも進んでいる。

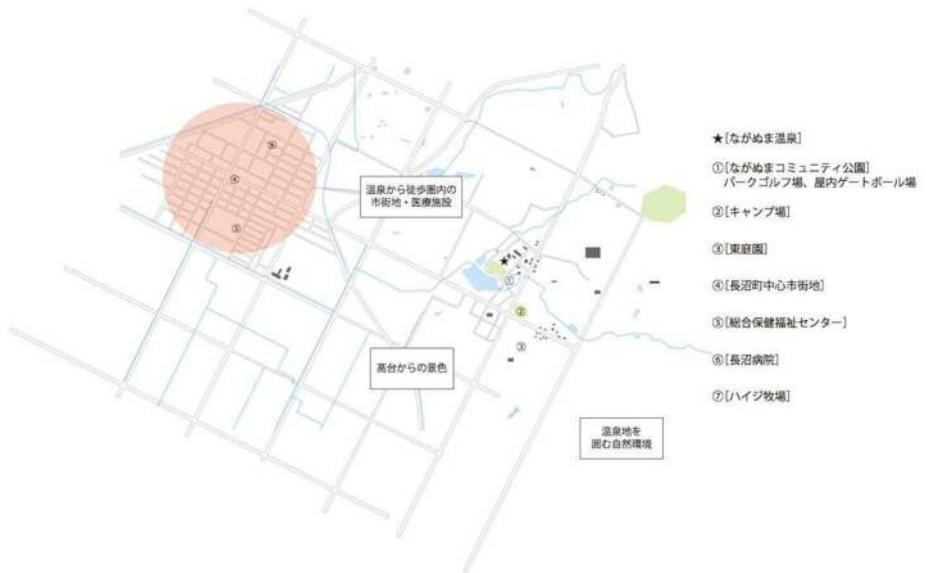


図6 「ながぬま温泉郷」の調査結果

(3) 幕別温泉

① 温泉地概要

1977年（昭和52年）に国民保養温泉地に指定された幕別温泉には、宿泊施設が、〔十勝幕別温泉グランヴィリオホテル〕と〔幕別温泉パークホテル悠湯館〕の2軒あるが、どちらも日帰り入浴を行っており〔住宅地〕も近いことから地域住民の利用も多く見られる。特に〔十勝幕別温泉グランヴィリオホテル〕周辺には〔娯楽施設〕が充実しており、まちの歴史資料を保存・展示する〔幕別ふるさと館〕や俳句が刻まれた石が並ぶ〔俳句村コース〕、〔パークゴルフ場〕、〔野球場〕、〔テニスコート〕、〔噴水や遊具が設備されている広場〕、〔焼き肉レストラン〕があり、文化から運動まで幅広く利用することができる。また、〔同ホテル〕から徒歩圏内に〔保健福祉施設〕も存在する。

② 温泉街の空間的ポテンシャルについて

帯広市中心部から少し離れた閑静な〔住宅地〕の隣に位置している。周囲には〔牧場〕や【田んぼ】、【途別川】を含む豊かな自然環境と〔パークゴルフ場〕をはじめとする〔運動施設〕が存在する。それらの環境は徒歩圏内に位置するが、「バス」によって連続した空間にはなっていない。今ある〔道路〕は、トラックのような大型自動車の通行が多く〔歩道〕もない。しかし調査から、今後は〔歩道〕のスペースを確保することで、〔住宅地〕、〔牧場・田んぼ〕、〔河川〕、〔十勝平野〕につながる〔フットパス〕の経路の整備が可能であると考えられた。また、それらに周囲の〔運動施設〕を絡める計画が求められる。

③ 保養地に向けた取り組みの現状

利用客の傾向としては、宿泊者は市外のみならず外国人（特にアジア人）の利用も見られ、日帰り入浴利用者はほぼ帯広市内の住民であった。幕別温泉がある幕別町札内南地区では、温泉や〔保健福祉施設〕が集中する特徴をふまえ、「健康タウン」という都市計画マ

スタートプランを宣言している。実際には、[幕別町老人福祉センター]で町内に在住する65歳以上の高齢者の方に対し、健康等福祉の増進のため無料の温泉入浴をはじめレクリエーションの場所を提供している。また、[パークゴルフ場]では幕別町内外からの利用者が見られ、そのついでに温泉に立ち寄るという行動パターンが多く見られる。しかし、それは町や温泉施設が利用者の健康促進を推進しているという動きではないため、周囲の環境を利用した利用者の行動はあまり見られない。今後は周囲の環境を生かした、まちづくりと絡めた取り組みをしていく必要がある。

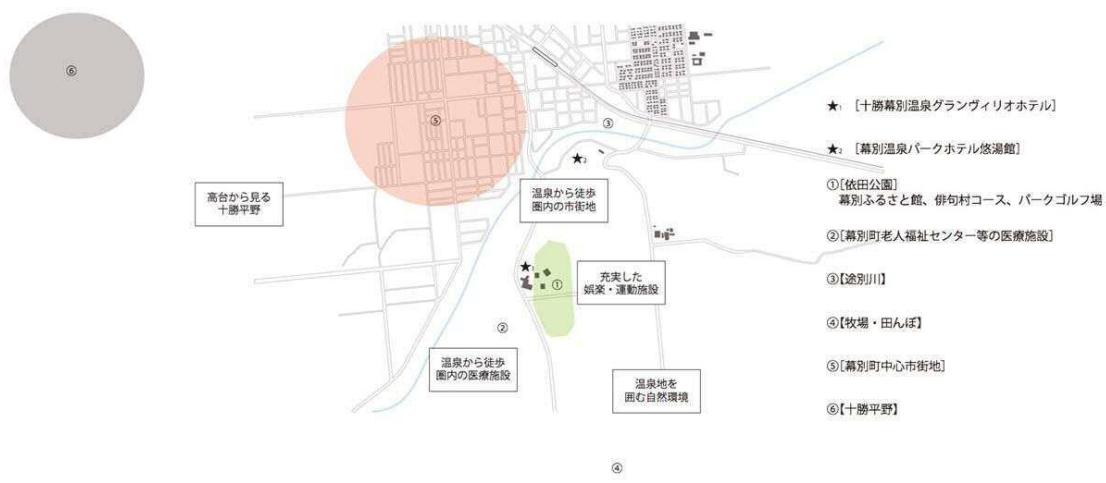


図7 「幕別温泉郷」の調査結果

3. 2. 3 「Eタイプ」調査結果（十勝岳、ニセコ、雌阿寒）

(1) 十勝岳

①概要

十勝岳温泉は、上富良野町から18km離れた【十勝岳】の麓に独立した地域を形成している温泉郷である。宿泊施設は【凌雲閣】、【カミホロ荘】、【ヒュッテバーデンかみふらの】、【吹上温泉白銀荘】の4件が存在する。夏期は【十勝岳】の登山客、冬期は湯治や山スキーなどを目的とした観光客が多くを占める。【大雪山国立公園】内に存在し、秋期の【紅葉】も見所である周囲の環境を上手く活用できている温泉地である。

②空間的特徴

温泉地は、【大雪山国立公園】内の【十勝岳】に囲まれた山奥に位置する。南側に標高の高い【山】が広がり、遠く北側に上富良野を含めた町が広がっている。4つの【宿舎】は半径4km程度の範囲に分布し、両端の施設を徒歩2時間程度で往復出来る空間になっている。その範囲に【散策路】と【広場】が設置されているため、施設同士の繋がりは強い。夏は登山の他に【森林】の中で散策やキャンプなどができる、冬は【雪】で覆われて【散策路】や【広場】の利用、登山は出来ないが、山スキーなどの利用に変わる。温泉地への道のりは【車道】のみになるが、冬期は【樹木】が落葉しているため町の見晴らしが良いなどの冬期ならではのメリットも楽しめるのが空間的資源である。【上富良野町市街地】からは18kmほど離れているため、町は遠景での見晴らしになり、空間的な繋がりは薄い。

③ヘルツーリズムに関する取り組みと現状

温泉施設利用者の傾向は、夏期は登山、冬は山スキーや湯治を目的に来る人が多く見られるということであった。ヘルツーリズムに関する取り組みとしては、十勝岳温泉は【散策路】や【広場】の利用促進のためのパンフレットや、冬期のスノーシューの貸し出しによって、周囲の自然環境体験を推進している。しかし、その他の取り組みはほとんどないのだが、利用者の自主的な活動によって、【十勝岳】という自然資源の利用が実現出来ていると考えられる。



図8 「十勝岳温泉郷」調査結果

(2) ニセコ

①温泉地概要

ニセコ温泉は【ニセコ連峰山麓】の倶知安町、ニセコ町、蘭越町の3町に点在する温泉湯と環境に優れた温泉地である。郷内には数多くの温泉郷が存在しているが、国民温泉保養地に指定されているのは、【昆布温泉】、【湯元温泉】、【五色温泉】、【新見温泉】の4ヶ所である。【ニセコ積丹小樽海岸国定公園】に位置していることもあり、【羊蹄山】、清らかな水をたたえる【神仙沼】、可憐な【高原植物】などの豊かな自然が広がっている。夏はカヌーや熱気球、冬はスキーなど充実の遊びも楽しめる、雄大で爽やかな高原リゾートの温泉郷だ。スキー場を中心とする観光を主要な産業とする。近年は、オーストラリアからのスキー客が増加しており、同国からの投資が盛んになっている。さらに、韓国を中心とする東アジア諸国からの観光客も増加している。

②空間的特徴

国民保養温泉地に指定されている4つの温泉郷は、それぞれの場所が離れているため、徒歩での移動は難しく繋がりはほとんどないが、空間的な特徴としては似ている面が多い。これらは、ニセコ比羅夫などの大衆を受け入れられる観光地とは違い、周囲を【山】に囲

まれた僻地に位置する。そのため【温泉施設】は「秘湯」と呼ばれるような、【旅館】のみで形成されている特徴がある。ただ、4つの温泉地の標高などの差によって、紅葉、泉質、樹木などの違いは見られ、多様な自然環境を楽しめるのも特徴のひとつである。特に五色温泉では周辺にアクティビティが整っており、【ニセコアンヌプリ】の裏側、【イワオヌプリ】の麓にあるため、それらの登山口として、また【神仙沼】の【ハイキングコース】の起点として、登山家やハイカーに利用されてきた温泉である。美しい景色を楽しむための【散策路】もあり、保養地としてのポテンシャルは非常に高い。【河川】も近場にあるため、釣り場としても良いとされている。【蘭越町市街地】とは、距離がかなり離れている事もあり、関係性はないものと見て良い。

③ヘルスツーリズムに関する取り組みと現状

ニセコ温泉郷のすべてまとめる温泉協会が存在しているが、3箇所の温泉に入ることが出来る温泉めぐりパスを提供しているのみで、現在目立った活動は行われていない。個々の温泉郷では、例えば新見温泉は、現在では珍しく、湯治目的で来るお客様の大半を占めている。一週間から2週間また一ヶ月近く湯治に来る方はリピーターが大半を占め、昔から通っている方が多い。周囲には目だったアクティビティはなく、湯治客は部屋でテレビを見てすごしたり、少し【旅館】の周囲を散歩したりして過ごすことが多い。これとは対照的に、五色温泉と、湯本温泉は、温泉とともに、外のアクティビティにも力を入れており、客の年齢層は比較的若い。湯元温泉の【雪秩父温泉】では施設の裏に【スキー場】があり、スキー目的で来る観光客が大半を占める。また、ニセコの上質な【雪】を堪能しようと、海外からのスキーヤーも目だった。



図9 「ニセコ温泉郷（昆布温泉）」の調査結果

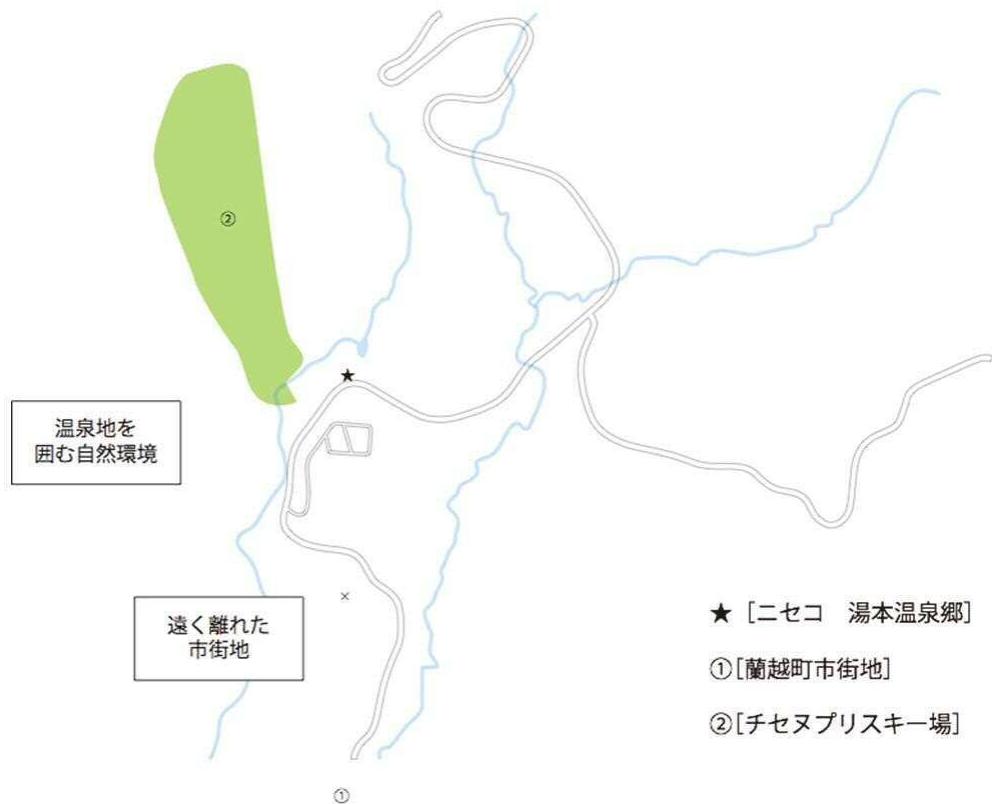


図10 「ニセコ温泉郷（湯本温泉）」の調査結果

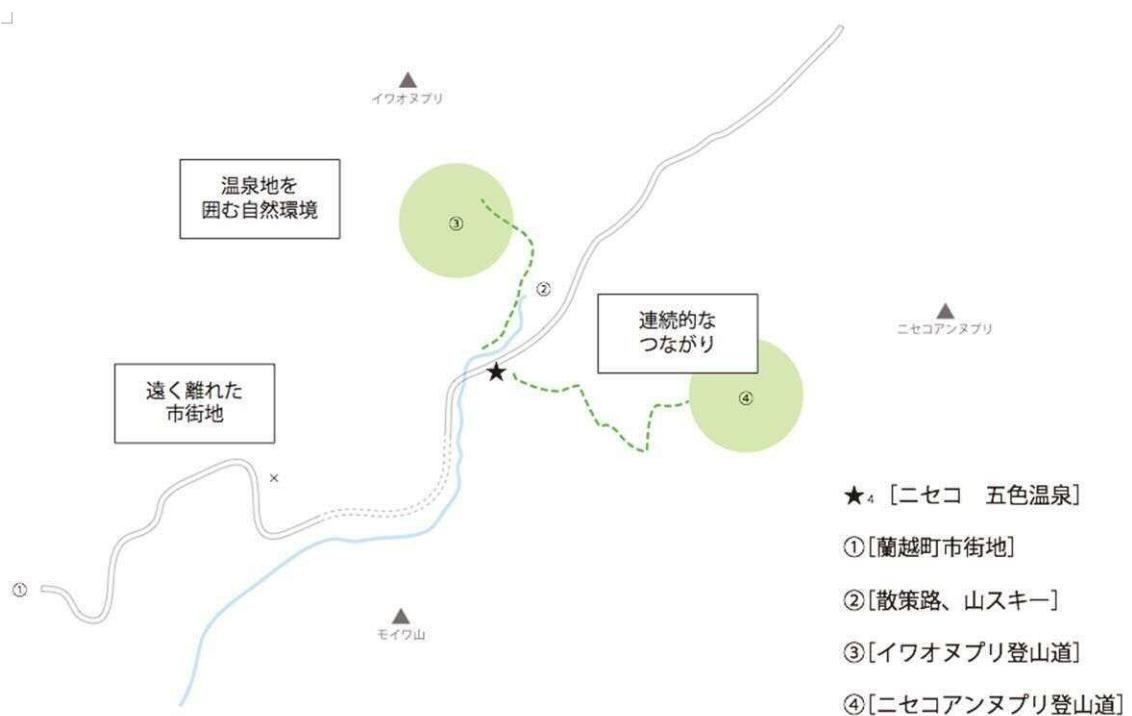


図11 「ニセコ温泉郷（五色温泉）」の調査結果



図12 「ニセコ温泉郷（新見温泉）」の調査結果

(3) 雌阿寒

①温泉地概要

雌阿寒温泉は1973年（昭和48年）に国民保養温泉地に指定された。敷地は【阿寒国立公園】内に位置し、【雌阿寒岳】や【阿寒富士】、標高700mの【原始林】に囲まれた自然豊かな場所である。宿泊施設は、[民営国民宿舎野中温泉別館]と[野中温泉ユースホステル]の2軒と、日帰り入浴のみの[オンネトー温泉景福]が存在する。医療施設は、町内に[足寄町国民健康保険病院]が配置されているが、雌阿寒温泉がある足寄町は東西66.5km、南北48.2kmにのび、その面積は1,408.09km²という日本一広い町ということもあり、温泉郷から[病院]までは約40km離れている。その他の施設としては[オンネト一国設野営場]があげられる。

②温泉街の空間的ポテンシャルについて

雌阿寒温泉は、[市街地]から遠くは慣れたオンネトー湖の近く【雌阿寒岳】の麓近く、外界から隔離された様な閉ざされた山奥に位置する。周囲は【オンネトー湖】をはじめとし自然環境の豊かな地域である。夏の利用は、[オートキャンプ場]をはじめ、國から天然記念物の指定を受けた【オンネトー湯の滝】や様々な動植物の観賞を楽しむことができる。

[散策路]が多いことで回遊性も高く、飽きずに利用することができる。また、【雌阿寒岳】や【阿寒富士】の登山客も多く、【雌阿寒岳】はその利用客の拠点になっている。冬の利用に関しては、積雪のため夏に比べてアクティビティの数は少ないが、スノーシューなどの利用で、[旅館]から【オンネトー湖】までの一体を散策することができる。その道のりは、冬期間通行止めとなる[車道]を利用しているため、ゆるやかな[道]が続き、車や利用者もなく閑静としていて、【オンネトー湖】含めたアプローチ空間はとても魅力的である。[市街地]とは全く別の地域を形成しているため、関わりはほぼない。

③保養地に向けた取り組みの現状

[民営国民宿舎野中温泉別館]は、【雌阿寒】の魅力の発信のためにさまざまな取り組みを行っていた。【雌阿寒岳】・【オンネトー湖】周辺の散策ガイドを制作し旅館で配布したり、スノーシューのレンタルにも興味のある人に対して積極的に行っている様子であった。また、「めあかん自然塾」という雌阿寒地域の資源と環境を有効活用した事業を推進している。

しかし、このような動きは、雌阿寒温泉地域内のみで動いていることであり、足寄町とのつながり、または[医療施設]とのつながりもほぼないと見える。また、【オンネトー湖】の歴史や情報の発信地として【オンネトー湯の滝】周辺に[ミニビジターセンター]が建てられたが、管理がずさんで現在は閉鎖されている状態である。



図13 「雌阿寒温泉郷」の調査結果

3. 2. 4 「Fタイプ」調査結果（北湯沢、盃）

(1) 北湯沢

①温泉地概要

1957年（昭和32年）に当時の厚生省に国民温泉保養地として指定された北湯沢温泉は、【洞爺・支笏湖国立公園】内の川沿いに広がる【温泉街】である。白絹の床のある【長流川】が有名であり、その流域に【旅館】が8軒、【結婚式場】が1軒、【リハビリセンター】が1軒ある。そのうち、北海道の観光業界では大手の野口観光が【旅館】3軒（湯元名水亭、湯元第二名水亭、湯元ホロホロ山荘）、【結婚式場】1軒（緑の森の教会）を経営しており、主な観光客はここへ訪れるようである。一方、【民宿】など個人経営の旅館の利用客は少ないように感じ、施設の整備も長年されていない様子であった。

②空間的ポテンシャルについて

【市街地】とは数キロ離れた【支笏湖洞爺国立公園】内の山奥に佇む《北湯沢温泉》は、周囲を【森林】に囲まれ、谷間を流れる【長流川】に沿ったかたちで【宿泊施設】が数件立ち並んでいる。【施設】の多くは【サイクリングロード（フットパス）】と【足湯】で【河川】と【森林】に繋がっているため、連続的な空間になっている。しかし、【散策路】が大型宿泊施設の【駐車場】を横切ること、【足湯】へのアプローチ空間が短く直線的であることなど、一部の計画に問題がある。一方、【大型宿泊施設】から少し離れた【御宿かわせみ】という旅館の露天風呂は、【河川】に隣接しているため露天風呂と【川】を行き来でき、とても開放的な場所である。そこは自然との関わりが強く感じられる場所であった。市街地とは【一般道】と【サイクリングロード】で繋がれているが、空間的な関わりは薄いと感じられる。

③保養地に向けた取り組みの現状

北湯沢温泉は伊達市大滝区に位置する。この地域の大滝観光協会は近年ヘルスツーリズムを取り入れた取り組みを始めていて、すでに野口観光と連携したモニターツアーを計画している。また、協会には 60 名程の加盟者がいて地域全体の繋がりを強化して観光を活性化しようとする動きは始まりつつある状況であった。温泉地から大滝地区中心街まで [サイクリングロード] や、[大滝総合運動公園] に繋がる [ノルディックウォーキングコース] が整備中であったりと、ソフト面と同時にハード面での整備も進められていて健康と観光を結びつける動きが見られた。

[医療施設] としては二つ病院が存在していた。しかし現在はどちらも無くなり高齢者のための [保健施設] に変わっているが、外来は依然として受け付けている。また、温泉を利用したリハビリを行っていた事もあるが、現在ではコストの面から中止されていて、医療との関係はあまり見られない。



図 14 「北湯沢温泉郷」の調査結果

(2) 盂

①温泉地概要

孟は、目の前に【日本海】が広がる【海滨】の温泉で、北海道西部、積丹半島の西海岸に湧く温泉地である。【奇岩】が連なり迫力ある海岸線に位置し、10 数軒の【宿】が静かな温泉郷を形成している。【日本海】と【山々】に囲まれ、【ニセコ・積丹・小樽海岸国定公園】に指定されている。【奇岩】・【絶壁】の断崖が続く海岸線は景勝で、近隣の【兜岩】は釣り場としても有名で、【海】と【山】に囲まれた自然豊かな環境の中、湯に浸かりながら雄大な【日本海】に沈む夕日を望めるのも魅力である。周辺では海水浴や磯釣り、キャンプが可能である。

②温泉街の空間構成

盃温泉は、【海】と【山】に挟まれた地域位置しているため、小さな領域に【宿舎】、【キャンプ場】などがまとまつた温泉郷である。それらは徒歩圏内で体験可能な小さな空間になっている。しかし、【海】の利用に関して、海岸が【コンクリートの階段】になっており、あまり【海】との関わりが期待出来ないものになっているのが問題点であった。一方、【弁天島】付近では、【岩場】を歩けるようになっているため、【海】との関わりが持てる空間になっている。【山】の利用に関しては、【林業用の道路】のみしか整備されておらず、一般的な観光客が足を踏み入れる場所にはなっていないのが現状である。そのため、周囲を豊かな自然環境に囲まれているものの多くの要素の利用が難しいのが現状であった。また、現在の温泉郷の範囲は小さくまとまりすぎているため、空間の多様性が見られない。そのため、アクティビティの少なさからみても長期滞在は難しいと考えられる。【市街地】とはそれほど離れていないが、【トンネル】を挟むことによって空間が分かれている。また、泊村に関しても【トンネル】を2つ挟むため、別の地域とみて良い。

③ヘルツーリズムに関する取り組みと現状

盃ではヘルツーリズムに関する取り組みは行われてない上、国民保養温泉地に指定されている事さえも知らない方（事業主）が多くいた。観光客に対してアンケートを行っていた様だが、ほかの同業者の方はそのような話は聞いたことがないと言う声もあり、盃温泉としての【宿泊施設】同士の連携は全くないことがわかる。また、キャンプでの宿泊者が多く、あまり【宿舎】を利用してないことが見受けられたが、それは盃の自然に魅力を見出している人が多いことが想像出来るが、今後は空間的な整備によるより多様な体験が可能な取り組みが期待されるだろう。

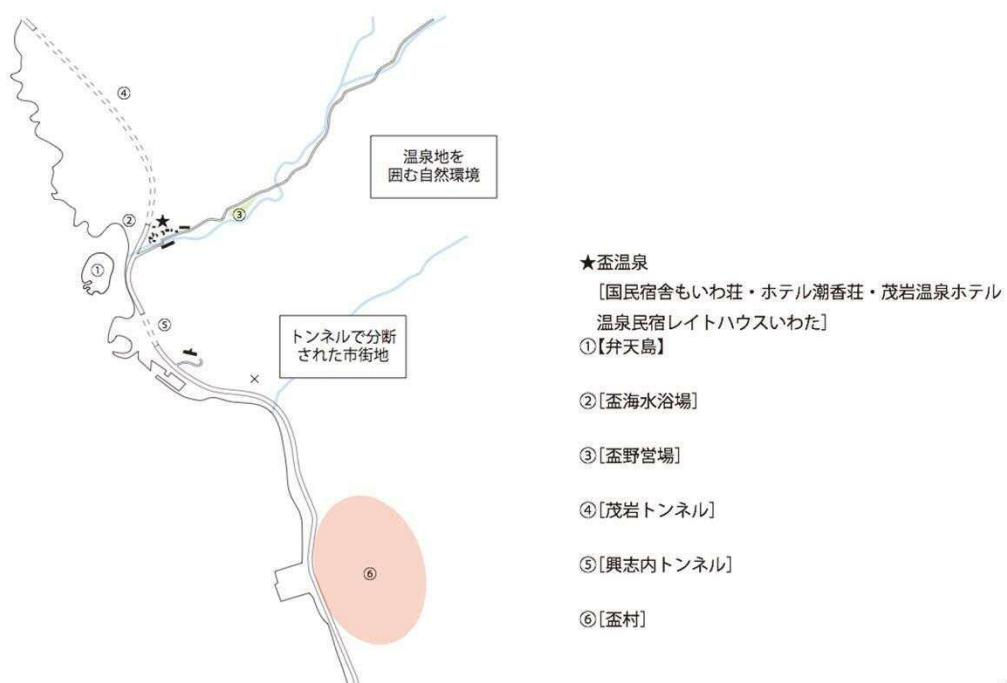


図15 「盃温泉郷」の調査結果

3. 2. 5 「Hタイプ」調査結果（芦別、カルルス、豊富）

（1）芦別

①概要

北海道で唯一の国民健康温泉地である芦別温泉郷は、[芦別市街地] から 7km ほど離れた周囲を【山】に囲まれた場所に位置する。宿舎は〔スターライトホテル〕一軒のみで、〔日帰り温泉施設〕、〔パークゴルフ場〕、〔油谷体育館〕、〔プール〕、〔テニスコート〕などの多くの〔スポーツ施設〕が一体となって構成されているのが特徴である。全日本バレー合宿などのスポーツ関係を目的とした利用者が多くを占め、芦別市民の利用は少ない。

②空間的特徴

芦別温泉郷の空間的な特徴としてあげられるのは、周囲を【森林】に囲まれていること、周囲の【山】が〔散策路〕として歩ける程度の標高であること、〔スポーツ施設〕が多く存在することの3つがあげられる。周囲を【森林】に囲まれている人里離れた温泉地であることは、保養の面からして良い条件であると考えられる。【山】の標高が低いことは、〔散策路〕の整備によって森林浴を兼ねた〔フットパス〕も実現出来ると考えられるが、しかし、現在〔散策路〕はあるものの整備されずに閉鎖されているのが現状である。周囲の自然を体感できる空間として利用出来る場所を生かす必要がある。そしてこの温泉地の施設の特徴である〔スポーツ施設〕に関しては、との連携によってよりよい周囲を【山】に囲まれたその資源を上手く活用できていない事がわかった。周囲の【山】は標高もそれほど高くないためウォーキングの感覚で登れる程度であるが、〔散策路〕があるにもかかわらず整備不良のため閉鎖され【山】を活用出来ていない。また、温泉郷には〔宿舎〕と〔体育館〕、〔テニスコート〕、〔散策路〕、などの〔スポーツ施設〕が多くある。しかしながら〔散策路〕は現在閉鎖中であり、その施設同士を結びつけることができていない。

③ヘルステーリズムについて

スポーツ施設の多さと周囲の自然環境を資源として、健康を意識した温泉郷として経営している温泉地であるが、具体的に事業主側が訪れた観光客に帯する運動推進や【森林】を利用したウォーキングなどソフト面での活動はあまり見られない。

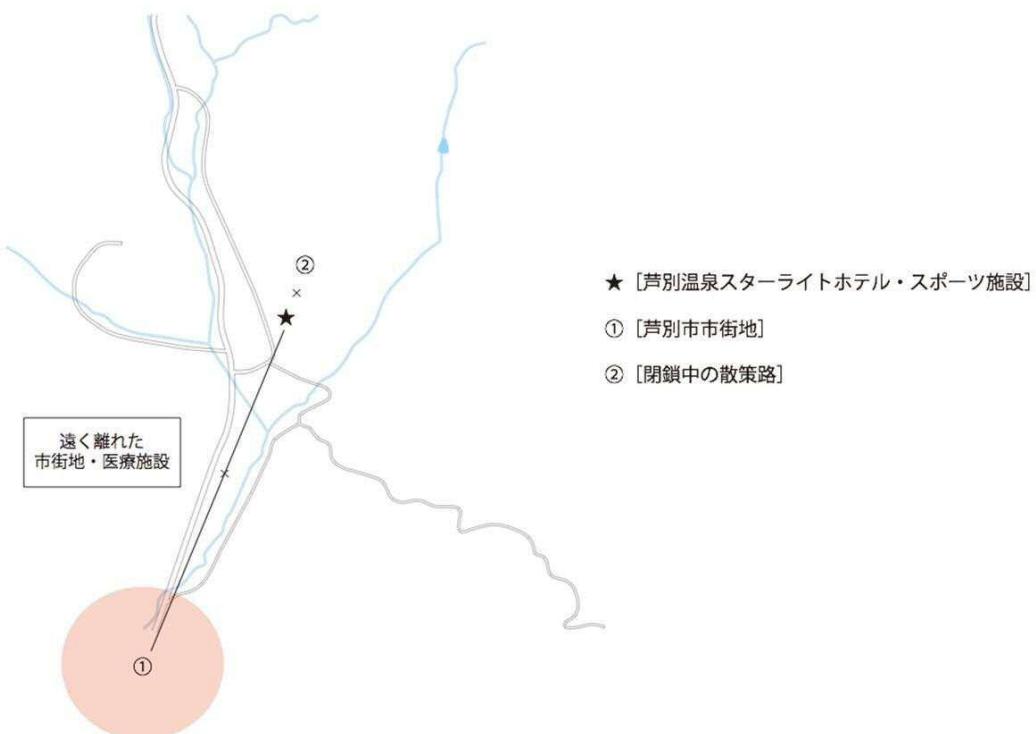


図16 「芦別温泉郷」の調査結果

(2) カルルス

①温泉地の概要

登別温泉の北西、【来馬岳】と【オロフレ山】の麓、【登別川】の谷間に現在7軒の【旅館】が存在するカルルス温泉は、1886年の開湯から13年後の1899年（明治32年）、温泉の利用許可を得て【温泉街】の開発が始まった。そこからさらに58年後の1957年（昭和32年）9月、当時の厚生省により、国民保養温泉地に指定された。草津や日光などの温泉地に取り残されているような温泉地であるが、湯量が多く質が良い。

②温泉地の空間構成

《カルルス》は登別川の谷間の狭い範囲に旅館が散らばっているような地域を形成している。周囲を【山】、【森林】に囲まれ、【山】は【スキー場】としても活用されている。その奥には【海】がみえ、豊かな自然の風景が広がっている。公園も存在し、近くの山には1時間半ほどの散歩道があるが、全くといっていいほど整備されておらず、熊が出たとの目撃情報もあるため、あまり利用されてないのが現状である。[市街地]との繋がりはなく、[温泉施設]が狭い範囲にまとまっただけの地域を形成している。

③ヘルスツーリズムに関する取り組み

温泉地の管理は地主の方が行っており、観光協会は存在しない。ヘルスツーリズムなどのツアーはやっておらず、昔から冬至の時期になるとお客様が増えるという、ひっそりとした温泉地である。湯治客は近くの市町村の農家の方が多く、古くからの湯治スタイルが今でも続いている。こうした湯治客に対しては長期滞在が可能な湯治プランを提供して

いる。湯質は良く、神経痛や胃腸に効果的で、場所によっては飲むこともできる。そのため、特に【病院】との連携があるわけではないが、お医者様に薦められて訪れるお客様が多く、1人で数日滞在する人も少なくない。



図17 「カルルス温泉郷」の調査結果

(3) 豊富 (2010.10. 調査)

①温泉地概要

豊富温泉は【天塩郡豊富町市街地】から 6km ほど離れた場所に位置する最北端の温泉郷である。最盛期には 15軒の【旅館】が建ち並ぶほどの立派な温泉地であったが、近年は5軒ほどに減少した。しかし豊富温泉は皮膚病（特にアトピー性皮膚炎、乾癬など）の治癒に効果的な事で知られ、現在でも全国から多くの湯治客が訪れている温泉地である。

②空間構造

豊富温泉は【豊富町市街地】から約 6km 離れた場所に位置し、周囲は【森林】、【山】などに囲まれた地域である。【旅館】が数件集まり、スキー場が隣接している。徒歩圏内において、周囲の環境を楽しめるような空間にはなっていないが、車などの利用によって【サロベツ原野】や【宮の台展望台】、【牧場】などの空間体験が可能になる。

③ヘルスツーリズムに関する取り組み

古くからその泉質は認められ、現在でも湯治を目的に利用される方が多く、【湯快宿】という湯治客が自炊しながら長期滞在できる宿舎もある。湯治客は本格的な皮膚病治療の

ため、仕事を長期で休みこの豊富温泉に長期滞在し毎日数回の入浴をする事でアトピーや乾癬などを治療する。しかし温泉郷にはほぼ【旅館】しか存在しないため、湯治客にレンタカーの環境を整え、少し離れた【市街地】にも簡単に行けるような仕組みをつくっている。近くには【豊富町自然公園】があるが、例えば、自炊のための食材を買い出しに豊富町に行ったり、国立公園の【サロベツ原野】や【宮の台展望台】、【牧場】などの少し離れた一般的な観光地にも足を運びやすくなった。豊富温泉の湯治の効果は泉質 60、周辺環境 40 と言われているが、これらの環境要素は徒歩圏内ではない少し離れた場所をさしているものと考えられる。「クアオルト」の視点では、徒歩圏内にある自然資源をより活用していくことが求められるだろう。

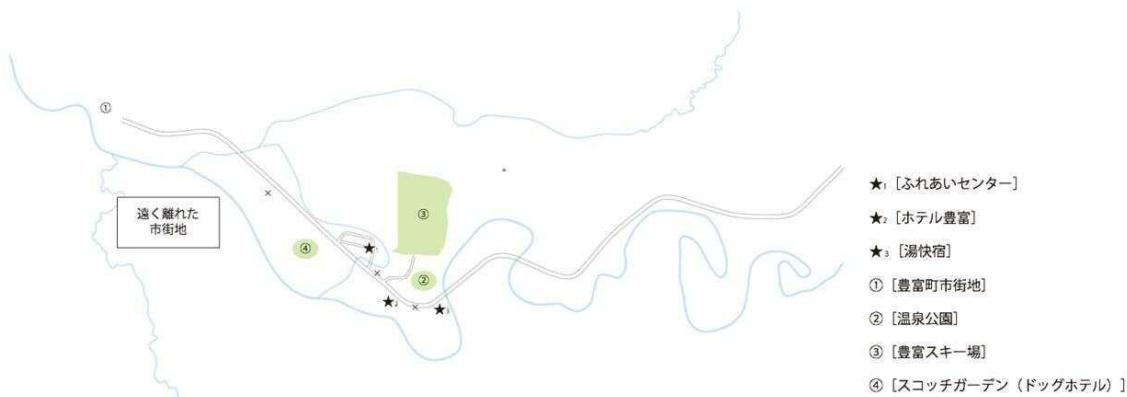


図 18 「豊富温泉郷」の調査結果

3. 3 タイプごとの特徴のまとめ

以上の結果から、各タイプごとの特徴をみていく。

3. 3. 1 「A タイプ」の特徴

このタイプに分類されたのは《洞爺・陽だまり》のみであった。特徴として以下の点が挙げられる。

○空間

- ・中心となる温泉施設が【市街地】に位置すること
- ・【市街地】にありがちも周囲に【森林】、【湖】、【農地】などがあること
- ・土地の高低差があまりないこと
- ・[各施設]と周囲に広がる【森林】や【湖】、【農地】が【フットパス】によって連続的な空間になっていること
- ・【市街地】や【湖】、【農地】などを見下ろせる視点場が【フットパス】上にあること
- ・【フットパス】が微地形を上手く利用していること

○取り組み

- ・【フットパス】の整備、観光客に対する情報提供

「Aタイプ」

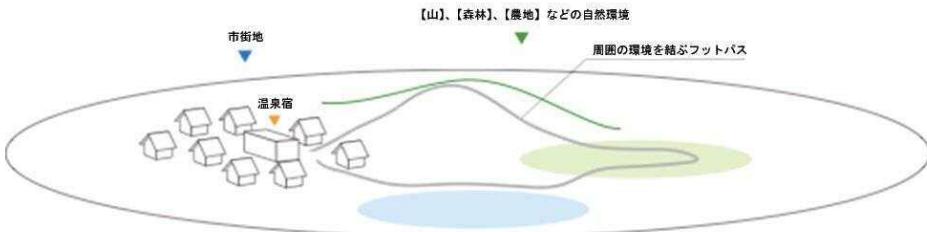


図19 「Aタイプ」

3.3.2 「Cタイプ」の特徴

このタイプは《恵山》、《ながぬま》、《幕別》、が分類された。共通する特徴として以下の点が挙げられる。

○空間

- ・[市街地] が徒歩圏内であること
- ・[市街地] に隣接しながらも周囲に【農地】、【河川】、【森林】などがあること
- ・[各施設] が連続的でないこと
- ・整備はされていないが、連続的な空間の形成が可能になるような [フットパス] のルートがあること
- ・周囲に [市街地] や [農地] を見下ろせる視点場があること

○取り組み

- ・特に目立った取り組みはない

「Cタイプ」

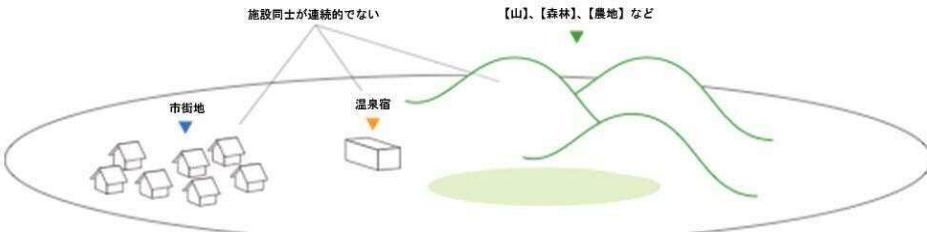


図20 「Cタイプ」

3.3.3 「Eタイプ」の特徴

このタイプは《十勝岳》、《ニセコ》、《雌阿寒》が分類された。共通する特徴として以下の点が挙げられる。

○空間

- ・[市街地] から離れた、土地の高低差の大きい山奥に位置していること
- ・周囲を【山】、【森林】などの自然資源に囲まれていること
- ・[宿泊施設] の徒歩圏内に [登山道]、[スキー場]、[散策路] などのアクティビティがあり、それらが連続的な空間であること
- ・[宿泊施設] の多くが「秘湯」と呼ばれ、少数の観光客を対象としていること

○取り組み

- ・周辺の自然体験に関する情報提供
- ・アクティビティを可能にする用具の貸し出し（スノーシュー、スキー）
- ・湯治プランがあること

「Eタイプ」

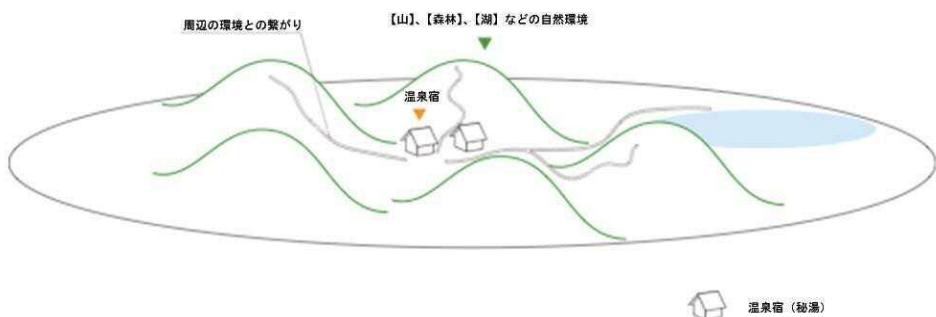


図21 「Eタイプ」

3.3.4 「Fタイプ」にみられる特徴

このタイプは《北湯沢》、《盃》が分類された。共通する特徴として以下の点が挙げられる。

○空間

- ・[市街地] から少し離れた場所に位置していること
- ・周囲を【森林】などの自然資源に囲まれていること
- ・[施設同士] が「バス」で結びついていること
- ・【地形や周囲の自然環境】と【各施設】が上手く結びついていないこと
- ・大型宿泊施設が存在すること

○取り組み

- ・観光協会とヘルストーリズムを目指したツアー（北湯沢/野口観光）

「Fタイプ」

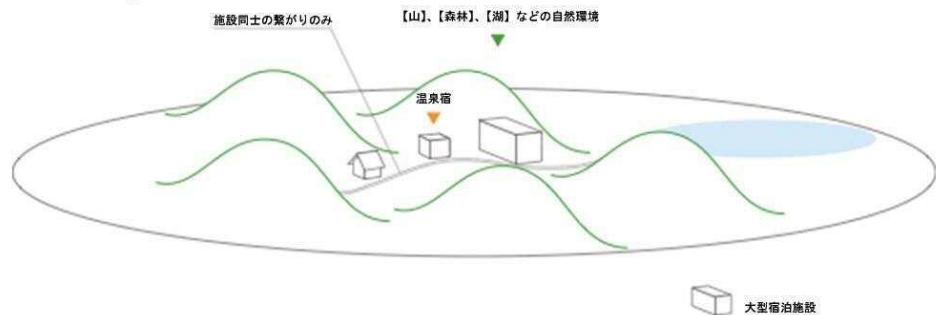


図22 「Fタイプ」

3.3.5 「Hタイプ」の特徴

このタイプは《芦別》、《カルルス》、《豊富》が分類された。共通の特徴として以下の点が挙げられる。

○空間

- ・[市街地] から少し離れた場所に位置すること
- ・周囲を【森林】に囲まれていること
- ・[温泉宿泊施設] と周囲の【森林】などとの空間的連続性がないこと
- ・[各施設] の繋がりがなく、寄せ集められた印象をうけること

○取り組み

- ・湯治プランがあること



図23 「Hタイプ」

3.4 結果のまとめ

以上のように、5つの空間タイプでそれぞれの特徴が得られた。大きく分け、「町一体型」として分類された「Aタイプ」と「Cタイプ」の特徴として、[市街地]との近かさ、周囲の自然環境の良さなどが共通した特徴であった。それらの違いは、施設同士または施設と自然環境要素の連続性であり、「Aタイプ」では整備されているフットパスによって連続した空間になっていた。「独立型」として分類された「Eタイプ」、「Fタイプ」、「Hタイプ」の温泉郷に関しては、[市街地]から離れた原生自然に囲まれた場所で、多くは国立公園内に位置する。3つのタイプを分けるのは個々の【施設】同士が計画的に連続しているか、また、【地形】や【自然環境】の特徴を上手く利用した空間になっているかどうかであった。

4. 考察

5つに分類されたそれぞれの結果を「クアオルト」の観点から考察し、北海道におけるクアオルト形成に向けた課題点を明らかにする。まず、5つに分類した空間タイプごとに現在の保養に関する取り組みと空間的特徴との関係性について考察する。このように、空間タイプごとに考察することでそれぞれの温泉地の周辺環境と連続した「クアオルト」的な観点からの評価が可能になると考えられる。以下に考察の流れの図と、その詳細について記述していく。

空間的特徴 × 取り組み → 空間的特徴が取り組みや現状に生かせているか？

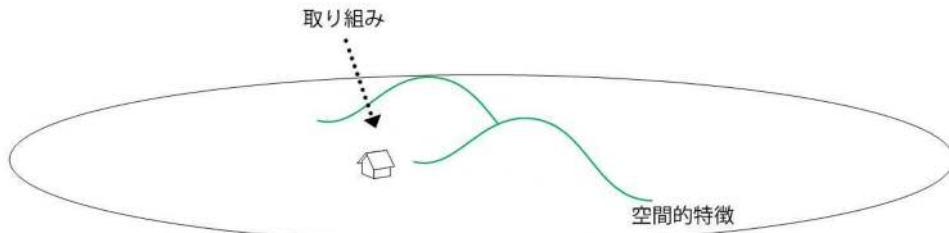


図24 考察の流れ

4.1 空間タイプとそれらの温泉地に見られるヘルツーリズムに関する取り組みの考察と課題点

4.1.1 「Aタイプ」

この空間タイプは、[市街地] に位置し、周囲を【森林】、【湖】、【農地】に囲まれ、それらを見下ろせる視点場が存在することが特徴であった。取り組みとしては整備中である [フットパス] を利用した健康ウォーキングを推進し、洞爺温泉を始めとした洞爺湖全体においてヘルツーリズムの動きを見せている。このように全体的に見て空間の完成度の高い保養地であるが、一方で地域住民の健康づくりとしての取り組みに対する意識が薄いように感じられた。「クアオルト」が地域密着型の保養地であることからも、今後は地域住民を中心とした温泉地の在り方の検討をする必要があるだろう。また、医療施設があることからも、それらとの連携した取り組みをまち全体で図って行くことが求められる。

4.1.2 「Cタイプ」

この空間タイプは、[市街地] が徒歩圏内であり、周囲を【農地】、【河川】、【森林】に囲まれ、[各施設] が繋がりをもっていないことが特徴であった。しかし、[施設] を始め周囲の環境を連続的なものにする可能性のある [フットパス] のルートは存在したため、今後は [市街地] や【農地】などを眺める視点場、微地形などを利用した計画が期待される。取り組みとしては、《ながぬま》が町民の送迎を行うバスの運行を行っている程度で、特に目立ったものはない。今後、地域に密着した保養地となるために、住民の利用の促進と同時に町民の [交流の場] や [休憩所] といった多面的な機能を持たせた [温泉施設] を中心とした、健康促進の場の形成が課題であると考えられる。

4.1.3 「Eタイプ」

この空間タイプは、[市街地] から遠くは慣れた山奥に位置し、周囲を【山】、【森林】などの自然資源に囲まれている。[宿泊施設] の多くは「秘湯」と呼ばれ、少人数の観光客を対象としている。その徒歩圏内には [登山道] や [スキー場]、[散策路] などのアクティビティの場が全体的に連続した空間を構成しており、それらを目的とする観光客がほとんどである。経営者側の取り組みとしはさほど大きなことはしていないが、周囲の自然環境とそれらに興味関心のある観光客の釣り合いによって保たれている。この関係が成り立つ背景として、【険しい山岳地帯】などの原生自然はもちろんのこと、それらを大衆化させ

ない「秘湯」の存在などが挙げられる。北湯沢などの【大型宿泊施設】が介入してこなかったため、観光客が周囲の自然環境をそのままのかたちで体験できる空間が残されている。今後は大衆化させない事を前提とし、土地固有のアクティビティをより深めることが期待される。

4.1.4 「Fタイプ」

この空間タイプは、「Eタイプ」と同じように【市街地】から離れた山奥に、周囲を【山】、【森林】に囲まれている。また、施設間も「パス」によって繋がれ連続的な空間となっているが、周囲の【森林】、【山】を上手く活用出来ていない。それは【大型宿泊施設】が周辺環境との関係性を無視した均質的な空間を形成していることが大きな要因として挙げられる。「Eタイプ」とは地形や自然環境は同様にも関わらず、【施設等】は全く正反対の空間を形成し、観光客の多くもこれらの均質空間を目的としているマスツーリズム的状況が見受けられた。具体的な例として、北湯沢では【サイクリングロード】や【足湯】を利用した自然環境を体験できる空間を利用し、ヘルストーリズムに関する取り組みも始めようとしている状況であるが、【施設】の計画自体が上手く周囲と連続していないことが問題点としてえられた。今後は、【施設】とその周囲に広がる自然環境を連続した空間として計画することが求められる。

4.1.5 「Hタイプ」

このタイプは、【市街地】から少し離れ、周囲を【森林】などの豊かな【自然環境】に囲まれている。そうでありながらも、【宿泊施設】と周囲の【森林】などの【自然環境】との空間的連続性がないこと、またいくつかの【施設】も寄せ集められたような空間を形成しているのが特徴であった。このような温泉地は以前から湯治目的に来る観光客が多く、それが未だに残っている地域もある。ヒアリング調査すべてを通じて、古くからの湯治のスタイルが、一日のほとんどを【宿泊施設】内で過ごすというものであることもわかった。そのため、周囲の環境を利用した空間は形成する必要性がなく、湯治客にとっても施設内でどれだけ休養できるかが重要であった。今後は「クアオルト」がそうなように、古くからの湯治スタイルから周囲の環境を体験することでの「保養」が重要視されるものと考えられる。そのため、【施設】の充実のみでなく。徒歩圏の周囲の環境を上手く活用した温泉地としての計画が求められる。

4.2 考察のまとめ

以上のように、温泉地を5つの空間タイプに分類し、それらの取り組みや現状と重ね合わせた考察を行った。「町一体型」の2タイプの温泉郷に関しては、【市街地】に密着した町民の健康づくりを重視する温泉保養地としての計画が期待される。特に「Cタイプ」の温泉郷では、課題点である施設を空間的に繋げる【フットパス】のポテンシャルがあると考えられたため、周囲の環境を上手く活用したコースの計画が求められる。

「独立型」に分類された3タイプ、特に【Fタイプ】、【Hタイプ】では周囲の環境要素と連続した空間の計画が必要であると考えられた。具体的には、【フットパス】を利用した、

[施設間]、又は[施設]と周囲の【自然環境】と触れられる空間の実現が期待される。

このように、本調査では「クアオルト」形成において重要な周囲の環境と連続した空間は、各施設、自然資源間の「パス（フットパス）」の存在の有無がポテンシャルに大きく影響することがわかった。また、「独立型」の温泉郷に関しては、大衆を相手にした大型観光施設などが周囲の環境との連続性を断ち切り、「秘湯」が周囲の環境を活用したアクティビティを誘発している傾向が見られた。つまり、各要素間の「パス」、周囲の環境、景観に対して影響（負荷）を与えない要素が、空間の連続性を保つということが知見として得られた。

V. おわりに

本研究は、北海道にある12箇所の国民保養温泉地を対象とし、①文献調査、②現地での空間調査、③ヘルスツーリズムに関する取り組みと現状の3つの方法による調査を行った。

調査結果の空間的特徴から温泉郷を5つのタイプに分類し、それぞれの共通される特徴とヘルスツーリズムに関する取り組みと現状の関係性を考察し、クアオルト形成に向けた観点から評価した。

① [市街地]と一体的な計画が求められる「町一体型」に分類され、[施設]同士又は[施設]と周囲の【自然環境】との連続した場所的空間が認められた「Aタイプ」は、その完成度の高い空間を生かし、それらの住民への情報提供、[温泉施設]における交流の場や休憩所としての機能の追加、などの実際の住民参加に向けた取り組みが期待される。

② [市街地]と一体的な計画が求められる「町一体型」に分類され、[施設]同士又は[施設]と周囲の【自然環境】とが連続しない空間が認められた「Cタイプ」においては、[市街地]との近さと周囲の自然環境の豊かさを利用し[施設]同士の連続性を図った[フットパス]の計画が求められる。

③温泉地として独立した計画が求められる「独立型」に分類され、[施設]同士又は[施設]と周囲の【自然環境】の連続した空間が認められた「Eタイプ」は、「秘湯」の存在が大きく、観光客の興味関心とその土地のポテンシャルの釣り合いによりアクティビティが成り立っていた。今後は大衆化を避け、空間の多様さを生かした、アクティビティの多様さを図っていく必要がある。

④温泉郷として独立した計画が求められる「独立型」に分類され、[施設]同士が連続してはいるものの、周囲の環境を上手く利用できていない状況が見られた「Fタイプ」では、[大型宿泊施設]の存在によるマスツーリズムの現状がみられた。今後は、大衆を相手とせず、ここにしかない周囲の環境を生かした場所的な空間計画が求められる。

⑤温泉郷として独立した計画が求められる「独立型」に分類され、[施設]同士又は[施設]と周囲の【自然環境】とが連続しない空間が認められた「Hタイプ」においては、[施設]からあまり出ない古くからの湯治スタイルが残っている閉鎖的な状況が見られた。これらのスタイルは今後、「クアオルト」としての保養のスタイルが求められると考えられるため、[施設]間の関係性、周囲の環境を利用した温泉郷空間の計画が必要になってくるだろう。

以上のように、〔施設〕間、又は〔施設〕と周囲の【自然環境】との連続性を保つのは、それらを繋ぐ「パス」の存在と、大衆的な観光ではない「秘湯」のような周囲の環境、景観に対して影響（負荷）を与えない要素が、空間の連続性を保つということが知見として得られた。このように元々、地理的なポテンシャルの存在する「国民保養温泉地」が、今後期待される保養地に発展するためのデータの整理、課題点の抽出ができたと考えられる。

これらの結果を導いた分類、考察はすべての温泉地に適したものではなく、北海道型「クアオルト」形成を目指した大まかな分類によりデータを整理したものであった。その際に地理的な空間構造と施設との関係性を取り扱ったが、今後は具体的計画に向けたより深い考察が必要とされ、その関係性に対してどのような計画を行っていくかを今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

- 樋口忠彦（1975）：「景観の構造」：技報堂出版
ケビン・リンチ 丹下健三 富田玲子 約（1960）：『都市のイメージ』：岩波書店
エドワード・レルフ 高野岳彦 阿部隆 石山美也子 訳（1991）：『場所の現象学』：筑摩書房
小関信行（2009）：療養・保養温泉地の環境計画に関する研究－ドイツのクアオルト（療養地）の地域デザイン手法を踏まえた地域資源を包括的に活用したわが国における温泉保養地の構想と環境計画－：東北芸術工科大学学位論文
国民保養温泉地協議会（2008）：「国民保養温泉地ガイド」：日本温泉協会
日本温泉協会（2003）：平成16年度国民保養温泉地における温泉利用に関する検討調査
日本温泉協会（2004）：平成17年度国民保養温泉地における温泉利用に関する検討調査
日本温泉協会（2005）：平成18年度国民保養温泉地における温泉利用に関する検討調査